



# News Letter

ニューズレター



No. 07

2023年7月発行

WEBサイトはこちら▼



お問い合わせ/広島大学大学院 人間社会科学研究所 教職開発専攻(教職大学院) 広報担当:寺内大輔  
東広島市鏡山1-1-1 TEL:082-424-7146 e-mail:terauchi@hiroshima-u.ac.jp https://kyoshoku.hiroshima-u.ac.jp/

## 新入生インタビュー

今年度、広島大学教職大学院には26名の新入生が入学しました。今回は、その中から4名の学生に、入学から1か月経った今の心境や抱負を語っていただきました。

### ① どうして教職大学院に？

**大岡** ● 私がここに来た理由は、教育の大学院に進学したいと思っていて、広島大学の教職大学院は、オンライン型できめ細やかな指導をしてくれるとホームページに書かれていたことに魅力を感じたからです。様々な先生方から色々な視点で学べるということから、この大学院を選びました。

**山口** ● 日本はアップグレードの機会が少ないと思います。外国の教員は、大学に戻って勉強して現場に出てを繰り返す機会があると思うのですが、日本にもこのような制度があればと管理職に相談したら、教職大学院への派遣制度を教えてください。受験することになりました。

**灰谷** ● 最近、集団への不適応感を感じている生徒が増加傾向にあります。これはまずい！と、学校の指導方法や生徒への接し方などを組織として見直す必要を感じ、何か取り組めることがないかと考えていました。一度外から学校を俯瞰することで、内部では気づけなかった学校の課題や、取組の方向性などが見えたらと思い、管理職と相談しているうちにここにたどり着きました。

### ② オリエンテーションを終え、教職大学院にどのような印象を持ちましたか？

**山口** ● 学生さんにパソコンの設定や大学のアカウントなど大学院の初期の手続きを手伝って頂けると思うと、頭が上がりません。最初か。知らない単語が飛び交い、最初

はかなりしんどかったですけど、このサポートを学生主体でできている組織がすごいと思って。中学校でも入学時期は気を揉みますが、これが中学年のオリエンテーションで上級生にこのようなシステムが確立されると、もっと楽に中学校生活を始めることができると思います。

**富崎** ● 現職の先生や教職志望の方が多いと聞いていて、すごく厳格なイメージがあり、最初は少し恐れていました。しかし、すごくアットホームで歓迎ムードがすごく。そして現職の先生方も気さくに話して下さって、楽しく学べそうだと印象を受けました。

**灰谷** ● キラキラしている印象です。学年代表やAR担当などの担当の一人一役もいいシステムだと思います。担当がそれぞれのことを話すことに始まり、色々な人が活躍する機会が散りばめられていて、現場でも学級経営でも活かせる場所があり素敵だと思つと同時に、とてもありがたかったです。

### ③ 教職大学院でどんなことを学びたいですか？

**大岡** ● 主に二つあって、一つ目は小学校の英語の指導方法を学ぶことです。私自身「文字と音とのつながり」に苦手意識があり、この部分のつまずきの解決策として、フォニックスを活用して考えていきたいなと思っています。二つ目は、広島島の教育について知ることです。私は神戸にいた頃から広島島の教育は進んでいると聞いていたので、現職の先生から話を聞いたり、実地研究



インタビューの一場面

写真左より▶  
学校マネジメントコース1年(現職院生) **灰谷 奈穂**  
教育実践開発コース2年(ストレート生) **大久保 孝** (インタビュー)  
教育実践開発コース1年(ストレート生) **大岡 紘子**  
教育実践開発コース1年(現職院生) **山口 努**  
教育実践開発コース2年(ストレート生) **藤本美沙子** (インタビュー)  
教育実践開発コース1年(ストレート生) **富崎 亮太**

で実際に学校に行ったりして、広島を学びたいです。

**富崎** ● 自分は高校の国語を専門にしたいと思っていて、学部の中から授業づくりを研究していたので、教職大学院では、実際に自分の作った授業をしてみようという気持ちで、また挑戦するというのを繰り返して、現場に出たときに場当たり的な指導はしたくないので、自分の中に指導の芯を一つ作っていきなと思っています。

**山口** ● 明確な答えはないですが、今の教育理論の最先端の知識を知りたいと思っています。それも学習指導要領に沿った話ではなくて、教育観とか日本の教育はどうあるべきかという話を先生方としてみたいと思っています。また、研究テーマにしたいと思っています。これは「主権者教育」です。当たり前のように子どもが社会に参加できるようにするにはどうしたらいいか考えてみたいと思います。

## 授業紹介

### 『教育相談・カウンセリングの理論と実践』

担当: **山崎 茜先生**

授業名の通り基礎的なカウンセリングスキルや教育相談の理論をしっかり学び、その学んだことを生かして実践を考え事例検討を行います。教職大学院が目指す「理論と実践の往還」が体現され、自分の現在地や成長度を実感することができる授業です。例えば授業の中で、あるいは課題として自分達がカウンセラーや保護者、子どもなどの役割に分かれてロールプレイを行った後、そのロールプレイについて検討する、などの活動もあります。ロールプレイをして終わりではなく、現職教員院生や他コースの院生からも様々な視点からのフィードバックを授業の参加者からしていただき、授業担当の山崎茜先生や石田弓先生(心理学講座)、栗原慎二先生(学校カウンセリング)からスーパーヴァイズ(アドバイス・指導)を受けることができます。さらに、ロールプレイングを繰り返したり、自分のロールプレイを文字起こししてみたりすることで自分の癖などを知ることができ、周りからの評価による成長実感だけでなく、自己分析を通して成長の土台とすることができます。多様な子どもたちがいる教育現場で、子どもの思いを聞くことができる教師になりたい方へ、お勧めしたい授業です。

執筆 **新浜 斗亜** ● 教育実践開発コース2年

### 『教育法規の実践演習』

担当: **米谷 剛先生・杉原 満治先生**

一人一人かけがえのない存在である子どもたちに向き合う教員には、法的思考を裏付けとする教育的思考が求められています。法規は時代の要請に合わせて更新されているため、「教育法規の実践演習」では、教員として理解しておくべき最新の法規法令について学び、学校における事例を検討していくことで、子どもたちの成長や信頼される学校教育の実現に向けて議論し、実践力を養います。法規法令に基づくことはもちろん大切なことですが、根拠として法規を示しただけでは同僚や保護者からの理解は得られません。1年間を通してじっくり学び、現場の経験や他の授業で得た知見と組み合わせながら、自身の教育的思考を豊かにし、子どもたちのより良い学びと育ちにつなげていきたいと考えています。

執筆 **山田 龍彌** ● 学校マネジメントコース1年



## いじめの未然防止に向けた「ぼっち感」低減のための 道徳科を中心としたプログラム開発

新野 悠太 ●教育実践開発コース2年

私は、いじめの未然防止を児童の友人関係からのアプローチで研究を行っています。友人関係の課題は様々ありますが「何か話が合わないなあ」「心理的距離が遠いな」と感じる些細なストレス（「ぼっち感」）に対して、友人観に課題を感じ異質性を認めることができるような活動を、道徳科を中心として行うことで減らそうと考えています。

昨年度のアクション・リサーチでは、小学校の複式学級に行かせていただきました。傾聴や主張の仕方をSST（ソーシャル・スキル・トレーニング）として練習することで、他者の意見を聞いて認め合うことができると仮定し、取り組みました。

今年度のアクション・リサーチでは、児童がそれぞれ持っている友人観を揺さぶる道徳科の授業を行い、相互理解や異質性を認めることができるように研究を進めています。

## 私 の 研 究

### 院生の研究内容をご紹介します！

## 中学校音楽科における音楽と「生活や社会」との 関わりについて考える授業の開発

小川 大輔 ●教育実践開発コース2年

音楽は私たちの生活や社会の中でどのような役割を果たしているでしょうか。お店に行けば BGM が流れていたり、気晴らしのために音楽を聴く人がいたりします。人の数以上に、多様な音楽との関わり方があるのです。ですが、これまでの音楽科の授業では、楽曲を始めとする音楽そのものを学習する傾向が強く、人々と音楽との関わり方までを意識させる学習は比較的多くはありませんでした。そこで、音楽そのものの学習のみならず、人々とその音楽との関わり方までを学習対象に含めることで、生徒たちが音楽と「生活や社会」との関わりを考えられるようになるのではと考え、研究を進めています。



▲西条酒造り場に合せて、酒造りの工程の一部を模した動きを実際にやってみる活動。音楽だけを聴くよりも、酒造り場としてのたつきをより強く感じられる。

## ご指導いただいている先生方の教育・研究

### 「思考を鍛える」大切さ

学校マネジメントコース

岡村 美由規 先生

おかむら みゆき

大学院人間社会科学部 准教授  
専門分野：教師教育学・教育哲学



岡村先生は、教師教育学と教育哲学の両者を相互に架橋して研究され、特に、教師教育者が持つべき知（識）を対象とされています。先生は、教師教育者が、教師の能力を強化するだけでなく、能力が発現される条件を考慮し、教師を支援できるようにするために研究をされています。

先生の教育観であり、願いとして、教師は「学校教員に与えられた権威を正しく行使できる職業人である」と仰っています。「学校教員は法に守られて公教育を担う職であるため、相応の権威が付随しており、「(学校の)先生の言動は少なからず、児童生徒や保護者に影響を与える」とは確かです。その自覚と、教えたことは自分が意図したようには伝わらない可能性があり、受け手も自由に思考し解釈する自由があるという「教育の限界」を自覚しておくことが、権威を正しく行使するために留意することだと仰っています。

教師が能力を獲得し、その能力を正しく発現させることの基底には、自らの言動の正しさを判断するための規範となる認識として「徳(Virtue)(アリストテレス)」があるそうです。先生は、私たち院生が徳を磨くための手段として、教職を離れた本(古典)を読むことを挙げています。「思考を鍛える」ことが、ひいては自身の徳を鍛錬することにつながるため、ぜひ本を読んでいきたいと感じました。



▲岡村先生が翻訳・執筆に携わられた書籍

執筆

石川 裕人

●教育実践開発コース2年

片山 峻河

●教育実践開発コース2年

### 〈越境〉する面白さ

学校マネジメントコース

吉田 成章 先生

よしだ なるあき

大学院人間社会科学部 准教授  
専門分野：教育方法学



吉田先生は教育方法を専門として、「すべての子ども達に等しい教育」のあり方を核に研究されています。学位論文では、社会主義思想に基づく東ドイツの教育学に、資本主義、新自由主義の日本が見るべき重要な側面があったのではないかと、という問いから東ドイツ教授学の歴史的评价というテーマで執筆されました。現在は学校の校内研修・授業研究、学校カリキュラムの研究、などを行っていらっしゃいます。また、広島県北部の学校の授業視察を通して、一つの授業づくりから、カリキュラムなどの全体を見て、一つの視点から研究をされています。コロナ禍を経て、全世界が人との関わりを絶たれた経験を共通で持つ中で、「人と人が関わることで、何ができるのか」ということに教育の本質をどう見出すか、が現在問われている「学校とは何か」という問いとつながる重要なものだと考えられています。今後、学校の役割は縮小するが、教育は、福祉的な意味を含み、拡大するという展望を持たれています。学生指導に関しては、問いを投げかけ揺さぶることを大切にされています。インタビュー中にも、吉田先生は「民族とは何か」「なぜ日本語の『生まれる』に対応する自動詞がないのか」等の問いを投げかけられ、私達の教育観・教職観が揺さぶられる瞬間がありました。また、英語・社会・教育学が混じり合う知の(越境)の楽しさについて触れられ、同時に「教科を極める」から壁が生じ、〈越境〉することができると思われていました。自分達の「問い」と答えに満足することなく、〈越境〉し「問い」続ける人間でありたいと感じました。



▲ドイツ・ライプツィヒ大学教育学部の研究者らとの研究打ち合わせの様子

執筆

大木 康平

●教育実践開発コース2年

中村 有喜

●教育実践開発コース2年

### みんなが共に学べる授業を

教育実践開発コース

大後戸 一樹 先生

おおせと かずき

大学院人間社会科学部 教授  
専門分野：体育科教育



大後戸先生のご専門は体育科教育で、長く体育における「運動観察」や「運動共感」に着目して、卒業生や現職の先生方と体育の授業研究を進められています。

大学院前期を修められた後、小学校で約20年間教鞭を取られ、教科担任制の広島大学附属小学校では体育科の授業研究に取り組んで来られました。体育・スポーツへの深い造詣と現場での豊富な経験を生かした授業研究は、多くの学生・研究者・現職教諭の注目を集めています。

インタビューの中で大後戸先生は、「大学院時代は現職の先生とも一緒に学び、その先生から多くのことを学ばせてもらった。みんなが共に学べる授業を創りたいという想いの根本は、この時に撒いてもらった種であり、その種が芽吹いているなど実感している」とお話しされ、「現場の教師になると日々目の前の業務で忘れてしまいがちだが、『みんなを大切にしたい』という信念は、決して変わらない部分」とも仰っています。それはしっかり大学で学び、研究出来る恵まれた環境があったからこそです。今の教職大学院はそれが叶えられる環境であることを再認識することが出来ました。



▲ゼミの様子

執筆

寺谷 里菜

●教育実践開発コース2年

堰楽 由理

●教育実践開発コース2年

## 編集後記 / 第7号

ニュースレター第7号をご覧いただき、ありがとうございます。

今年度は、26名の新入生を迎えました。

教職大学院では、校種や教科の枠を越え、様々な思いをもった人とつながることができます。

本号の編集を通して、その環境のありがたさを改めて感じる事ができました。

担当 / 田中 佑明

●教育実践開発コース2年

服部 美紀

●教育実践開発コース2年